

(様式 5)

「秋田大学研究者海外派遣事業」帰国報告書

平成29年7月29日

所属・職名：国際交流センター・准教授

氏名：市嶋 典子

派遣期間：平成28年5月7日～平成29年3月2日

派遣研究機関名：英文 Dept of Asian and North African Studies Ca' Foscari University of Venice

：和文 ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 アジア北アフリカ研究学科

研究課題：「移動する人々」の言語意識とアイデンティティ

○研究概要（2000字程度）

人の空間的・言語的・文化的移動はすでに珍しいものではなくなり、それに伴い、「移動する人々」（学習者、研究者、国際組織の枠で働く者、移民、難民等）を対象とした研究が注目されるようになってきた。複数の言語的・文化的背景を持つ個人と言語との関係は、言語能力に重きを置いてきた従来の研究では明らかにできない側面が多い。一方で、移動する人々に対する言語教育研究は、個人の経験よりも、教育の方法論に関心が寄せられがちであり、「移動する人々」と言語との関係、移動する前の歴史などが軽視されており、個人の経験を分析する際も、経験を脱文脈化し、歴史や社会的文脈を収奪した形になりがちであることが問題として指摘されている（アリアーヌ・ゴアール2011）。「移動する人々」の経験は、社会的、文化的、政治的、経済的状况によって規定されており、その経験が言語意識やアイデンティティに様々な形で影響を与えている。それゆえ、彼・彼女等の言語意識やアイデンティティを考察する際には、一人一人のライフストーリーを多様な文脈で捉える必要がある。

筆者は、以上の問題意識を持ち、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学アジア北アフリカ研究学科のマルチェッラ・マリオッティ先生のもとで研究を行った。研究としては、空間・言語・文化の境界を「移動する人々」が、移動の過程でどのような言語教育を受け、言語にまつわるどのような経験をしたのか、またそれによりどのような言語意識を持つようになったのかを考察した。主にイタリア在住の東ヨーロッパや中東出身者を対象に調査を行った。同時進行で、ヨーロッパ各地に移民、難民として渡った人々へのインタビュー調査も行った。研究方法としては、ライフストーリー研究法を用いた。ライフストーリー法は、語り手の経験や見方を探究するものであり、語り手が自らの人生や生活の物語を語ることで、語り手の社会と自己との関わりとその捉え方、すなわちアイデンティティ観とその交渉に迫ることができる。このような

(様式 5)

質的研究により、「移動する人々」の日常生活の多様な実態、詳細な意識の変化のプロセス、言語とアイデンティティの関係が明らかになることを目指した。その成果の一部を、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学で開催された 2016 年日本語教育シンポジウムにて、「海外の日本語学習者の言語選択とアイデンティティ」Language selection and identity of learners of Japanese language in abroad として発表した。

ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学にはイタリア随一の日本語専攻があり、日本語と日本学を学んでいる学生たちは、学部・修士課程・博士課程を合わせると、およそ 2,000 人にものぼる。滞在中、筆者の受入れ教員であるマルチェッラ・マリオッティ先生、早稲田大学の細川英雄先生と共に、同大学の日本語ゼロビギナーの学習者を対象に、全 16 回のワークショップを行った。活動内容は、一人一人が自身の好きなテーマを選び、そのテーマについて一人の人とじっくり対話をした上で、対話相手と自分の考え方の関係について考えていくものである。ワークショップは、学習者の許可を得た上で、全てビデオ録画を行った。(詳細は <http://ichishima.thyme.jp/report1.html> を参照。) このワークショップの成果の一部を

Mariotti, M., Ichishima, N. (2017). Practical studies in Japanese language education: A report about *Action Research Zero Workshop* in Venice (Italy). *Annali di Ca' Foscari: Serie orientale*, 53, 369-378.

にまとめた。今後、本ワークショップで得た言語データおよび、インタビューデータを詳細に分析し、論文化していく予定である。

また、マルチェッラ先生・細川英雄先生の編著で以下の論文を執筆することができた。

市嶋典子 (2016). 「平和構築への市民性形成」細川英雄, 尾辻恵美, マリオッティ, M. (編) 『市民性形成とことばの教育——母語・第二言語・外国語を超えて』(pp. 151-188) くろしお出版.

このように、在外研究中、マルチェッラ・マリオッティ先生と様々な共同研究を進めることができた。今後は、収集できたデータを分析し、新たな学会発表や論文執筆につなげていきたいと思っている。

【参考文献】

アリアーヌ・ゴアール＝ラデンコヴィック (2011) 「国際的な移動の中にあるアクターたちの新たな争点と戦略—移動の教育の概念に向かって」『言語教育とアイデンティティ—ことばの教育実践とその可能性』細川英雄 (編) 春風社

(様式 5)

○研究期間全般にわたる感想

(写真等があれば添付願います)

ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学では、積極的に海外からの研究者を受け入れており、また、これらの研究者との共同研究を積極的に推進していた。ヴェネツィアでの一番の収穫は、研究コミュニティが広がったことである。世界中の様々な分野の研究者と交流することができた。多くの研究者が世界中を柔軟に移動しながら、自身の研究を深めていく様子はとても印象的だった。ここで知り合った研究者とは、ポルトガル・リスボンの Universidade NOVA de Lisboa (リスボン新大学) で行われる第 21 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (15th EAJIS International Conference 共催) にて、『平和をめざす言語教育』をテーマに、パネルを組んで発表することになった。今後も今回の在外研究を通して広がった研究コミュニティを大切にしていきたいと思っている。また、受け入れ教員であるマルチェッラ・マリオッティ先生にも公私共に大変、お世話になった。マルチェッラ・マリオッティ先生とは、これからも積極的に共同研究を進めていく予定である。

ヴェネツィアでの生活は非常に快適だった。治安も良く、特に大きな問題なく過ごすことができた。大学内では日本語でやりとりができる環境にあり、また観光客が訪れるような場所では英語が通じた。しかし、生活をしていく上では、イタリア語が必要となる場面が多々あった。役所や住居の手続き等では高度なイタリア語が求められたが、マルチェッラ・マリオッティ先生をはじめ、現地でできた様々な友人のサポートにより、多くの問題を解決することができた。筆者は、現在、秋田大学で留学生を受け入れ、日本語教育を担う立場にあるが、彼・彼女等が生活上、どのような場面で困難な思いをするのかを身をもって知ることができた。この経験を今後の受け入れ体制に活かしていきたいと思っている。

また、滞在中、研究者たちと Venice Biennale / Venice Biennial 国際建築展を訪れる機会があった。Venice Biennale / Venice Biennial は、ヴェネツィアで 1895 年から開催されている現代美術や建築の展覧会であり、この展覧会は、万国博覧会のように、国が出展単位となっている。2016 年度は、日本館が特別審査員賞を受賞した。ヨーロッパの国々からも多くの出展があったが、その中のいくつかでは、移民や難民といかに共存、共生していくかがテーマとして掲げられていた。他分野ではあるが、本展示をとおして、研究に関する多くのヒントを得ることができた。

このように、研究者海外派遣制度をとおして、様々な経験をすることができた。この経験をぜひ今後の研究、教育に活かしていきたいと考えている。

(様式 5)



イタリア、ドイツの日本研究者たちと



ワークショップの様子



ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学
キャンパス



ヴェネツィアの風景

※報告書は、国際交流センター刊行物（Web サイト含む）に公開を予定しております。
電子データをご提出ください。